

仁清の雉：色絵釉薬の至宝

部屋の中央に置かれた2つの雉香炉は、17世紀の陶芸家、野々村仁清の代表作である。雉をモチーフに、色鮮やかな雄と淡い色の雌のつがい表現している。この作品は、仁清の数ある代表作の中でも異彩を放つ作品である。

仁清は、17世紀中頃から後半にかけて京都で活躍した。京都や瀬戸（現在の岐阜県の南部）の窯元で修業をした後、京都西部の山麓にある仁和寺の近くに自分の窯を構えた。そこで培った上絵付けの技術は、京焼の発展に大きく貢献した。

京焼は、宮廷の生活や茶の文化と深く結びついていた。この香炉をはじめ、現存する最古の京焼の多くは、茶の湯、または茶道に使われた道具である。茶室で香を焚き、清らかで静かな時間を演出する。

仁清は名工の中でもいち早く、作者を特定するサインのような印、「陶印」を施した職人の一人である。これは、陶工を無名の労働者ではなく、一人の芸術家として位置づける考え方の転換を意味していた。

仁清はまた加賀藩（現石川県、富山県）の九谷焼の発展にも大きな影響を与えた。前田家の殿様やその家臣たちは、仁清の作風を深く理解し、ここに展示されている雄雉をはじめ、多くの作品を手に入れた。

羽毛と色彩：カラフルな雄

仁清は轆轤の名手として知られているが、この作品からは、手捻り、絵付け、釉薬にも長けていることがわかる。

例えば、この雉の尾。この胴体から完全に水平に長く伸びた尾は、粘土が自重で垂れ下がったり、焼成中に割れたりしやすいため、制作は至難の業である。そこで仁清は、尾の下に支柱を立てて窯に入れ、尾の裏側に小さな跡を2つ残している。

正面から見ると、首がわずかに傾いており、生き生きとした活気のある表情をしている。このポーズをとるために、仁清は焼成による粘土の収縮やゆがみを考慮しなければならなかった。このような変化を予測することができるのは匠の技であり、香炉の上下がぴったりと合っているところも、仁清の腕前を物語っている。羽の模様は分割して連続させ、わずかな隙間を目立たなくしていることにも注目したい。

この雄のリアルに表現された羽毛は、色絵の好例である。この技法は、釉薬をかけて焼成した作品の表面に色釉をかけ、さらに低温で焼成して2層の釉薬を融合させるものだ。絵の具が発色し、焼成中に流動化するため、陶芸家は求める効果を明確にイメージし、さまざまな温度での材料の反応を総合的に理解する必要がある。仁清の時代に、中国から色絵の技法が日本に伝来して間もないことを考えると、万華鏡のような雄雉の羽の再現には目を見張るものがある。

この「雄雉香炉」が国宝に指定されたのは1951年で、少し変わった事情があった。17世紀末から18世紀初頭にかけて、前田家が家臣にこの作品を下賜し、その子孫が19世紀末に商家の山川家に売却した。山川家はこれを非常に大切にし、限られた人にしか見ることを許さなかった。国宝に指定しようとしたとき、山川家は東京での公開と指定式を拒否した。その結果、公開されることなく国宝に指定されたのである。